



TITLE:

景氣變動と日本資本主義の發生

AUTHOR(S):

谷口, 吉彦

CITATION:

谷口, 吉彦. 景氣變動と日本資本主義の發生. 經濟論叢 1929, 29(4): 547-568

ISSUE DATE:

1929-10-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/129801>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

經濟叢論

第 四 號

卷九十二第

昭和四年十一月一日發行

論 業

百貨店稅論

法學博士
神戶正雄

我國^{けるに於}生命保險業^の首唱 其先驅

文學博士 三浦周行

經濟靜學と經濟動學

文學博士 米田庄太郎

時論

地租の改正を論ず

經濟學博士
沙見三郎

說苑

景氣變動と日本資本主義の發生

經濟學士 谷口吉彦

預金通貨の造出に際しては通説と新説

經濟學士
小川福太郎

明治政府の貸附金

經濟學士 吉川秀造

雜
錄

獨逸農業の現状

經濟學士 八木芳之助

「獨立財源」の意義に就て

經濟學士
中川與之助

經濟統計^{する}國際條約に就て

經濟學士 有非治

禁漁制度について

岡本清造 經濟學士

近着外國經濟雜誌主要論題

景氣變動と日本資本主義の發生

谷 口 吉 彦

一 國民經濟の發展と景氣變動

多くの有機體に於けると同じく、國民經濟の生成發展に於ても亦、その全期間を通じて一樣に規則正しき進展をなすものではない。第一に發展の速度は、時には急速であり時には緩慢であり、時には停頓し時には飛躍する。第二に國民經濟の全野に亘つて、各部が一樣に均整な發展を遂ぐるものでもない。或る時期には基礎産業が著しく發展し、或る時期には製造工業が特に發展し、時には重工業、時には輕工業といふが如く、産業部門の均衡關係は常に破られつゝ、而も破られたる均衡は常に恢復せんとしつゝ、不斷に進展するものである。

それ故に國民經濟の發展を現實に即して跡づけるためには、吾々は國民經濟の各部に亘つて嚴密な實證的歴史的研究をなすと共に、他方に(1)國民經濟が全體として、或は飛躍し或は停頓した

跡を顧み、(2)この飛躍や停頓が如何なる内容に於て行はれたか、換言せば國民經濟各部の交互的發展が、時代と共に如何に進展したかを見なければならぬ。

この目的のために有效なる一の方法は、國民經濟の發展を景氣變動の視角から觀るにある。蓋し發展の速度が急速に飛躍する時期は、言ふまでもなく好景氣の時代であり、その速度の緩慢停頓する時期は、不景氣または恐慌の時期である。また特定の好景氣は其の内容に於ては、國民經濟の特定部分の特殊な發展を意味することが極めて多い。それ故に景氣變動史の立場から國民經濟の發展を跡づけることは、それだけ現實の發展に即して全體的觀察をなし得ることを意味する。現實の事實としては國民經濟は常に、好況か不況か恐慌かの景氣の經過に於てのみ存在し、景氣變動を離れた國民經濟は、抽象的觀念の上にのみ存在し得るに過ぎないからである。

この意味に於て、景氣變動史の見地から、我國に於ける資本主義の成立發展の過程を觀察するは、興味深いことである。此の小論は、此の課題の序説を成すものであり、日本資本主義發生の時期、換言せば資本主義が新たな政治的地盤の上に準備され、發生しつゝある時期に限り、この期間に於ける景氣變動が我が資本主義の發生の上に如何なる役割を演じたかを明らかにせんとするものである註。

註 我國の景氣變動に關する史的研究としては、福田博士の論文を第一に挙げねばならぬ。此の論文は我が景氣變動の特殊性

を明にされ、經濟政策と經濟生活との密接な關聯、外來影響に對する國民の樂觀性、戦争と景氣との密接な關聯を高唱されて、極めて特色ある重要な文獻である。土方博士の研究も亦、まことに要領よき概觀を示されてゐる。吾々は兩博士の研究

- 1) Tokuzo Fukuda ; La « Cyclicité » de la vie économique et de la politique économique, éclairé par l'exemple de l'évolution japonaise de 1868 à 1925 dans ses rapports avec l'étranger (Journal des Économistes. 84. 1926)
- 2) 土方博士 ; 明治大正に於ける恐慌原因の一研究 (經濟學論集第五卷第四號昭

から多くのものを學び得るが、此の小論は景氣變動と吾が國民經濟の發展との關係を見た點に於て、兩博士の研究とは自ら異なる立場にある。日本資本主義の發展に關する高橋龜吉氏の近著³⁾、猪谷善一氏の研究等は、必ずしも筆者の見解と一致するものではないが、それらの立場に於て教へらるゝ所が多い。

二 明治十年間の政治的準備

(一) 明治元年から西南役の鎮定に至る十年間は、維新の變革に伴ふ反動的騷亂を平定して、明治政府の政治的勢力を確定した時代である。従つて之を資本主義の發展より見る時は、この時代は恰かも我が資本主義の政治的地盤を準備した時代に當る。資本主義は個人の財産と自由を確保する統一的國家の存在を前提とするものであるから、封建的政治組織の地盤の上には決して成立し得るものではない。近世資本主義が我國に發展し得るためには、何よりも先づ其の政治的地盤を準備せねばならぬ。明治政府は一方に、當時に於ける最も優秀な階級の最も教養ある人々即ち謂ゆる明治の元勳の寢食を忘れた活動と、他方に封建制度の下に商業資本を蓄積し來つた當時の富豪階級、殊に其の進歩的分子の財政的援助とを以つてして尙ほ、種々の機會に種々の形態をこつて現れ來る舊勢力の余燼を全く鎮定して新勢力を確定するためには、約十年を要したのであつた。

尤も此の時代と雖も、明治政府は經濟的施設を全く顧みなかつたといふのではない。商法司は既に明治元年におかれ、之に代つた通商司は、爲替會社をして金融事業を、通商會社をして通商

和二年) 同上、日本經濟研究(昭和三年)下卷一三一六頁以下、
3) 高橋龜吉著；明治大正産業發達史(昭和四年)、日本資本主義發達史(昭和三年)
4) 猪谷善一著；明治維新經濟史(昭和三年)
1) 木庄博士；明治初年大阪の御用金(經濟論叢第二十八卷 第一號、昭和四年一

貿易を行はしめ、明治五年には爲替會社を廢して國立銀行を創設し、更に製絲・製絨・紡績・セメント・硝子等の新式工業に就ては、政府自ら模範工場を設けて直營事業を興しつゝあつた。是等の經濟的施設が間接に我が資本主義の發展に資した點は少くない。殊に政府の模範工場は、新式技術の傳授といふ點に於て重要な影響をもたらしたものであるが、併し私の見る所では、此の時代に於ける多くの經濟的施設は、何等直接に資本主義を準備したものではないと思はれる。それ等の多くは準備といふよりは寧ろ試練であり、殊に最も注意すべきことは、是等を施設した政府の重要な動機の一つは、確かに政治的財政的であつた。即ち明治政府の財政的基礎を鞏固にし、その政治的勢力を確立することが、是等を施設する政府の重要な動機の一つをなした。例へば明治初年の太政官札は、名義上は民業振作のために發行されたことゝなつてゐるが、その『實際主要の目的は、歳入の缺乏を補填するに在り』⁴⁾しこと疑ふべくもない。⁵⁾また商法司・通商司・爲替會社等の施設は、金融疏通と民業振作を目的としたものではあるが、その資金の貸付は主として太政官札によつたものであり、之によつて政府紙幣の流通梗塞を打開し、財政を確立せんとしたのも其の目的の一つであつた。⁶⁾

爲替會社に代つた國立銀行の主要な目的は、右の不換紙幣たる太政官札を償却して、之に代ふるに兌換紙幣たる銀行紙幣を以つてせんとする政治的財政的のものであつた。⁷⁾國立銀行が銀行本來の目的に立ちかへつて金融を疏通し物産工作を振作するに至つたのは、寧ろ明治九年の條例改正以後のことであり、『此改正(九年)は五年國立銀行條例制定の精神たる政府紙幣整理の方法を

月一日)

2) 猪谷善一著、明治維新經濟史第六章第三節參照

3) 吉野學士、明治初年に於ける大阪爲替會社外二論文(經濟論叢第二十八卷第二三號、昭和四年二三四月)參照

4) 松方正義、紙幣整理始末(明治二十三年)一三頁

全く廢棄し』政治財政を離れて純經濟的に其の機能を發揮せしめんとするものであつた。最後に模範工場を中心とする殖産興業策も、そのこと自身のために標榜された許りでなく、之によつて政府の收入を増し財政を確立せんための手段としても唱導されたものであり、幕末時代に於ける幕府及び諸藩に於ける類似の政策と相去ること遠きものではないと思はれる。

かくの如くして此の時代に於ける政府の經濟的施設の多くは、單なる經濟的目的のみならず、政治的財政的目的をも一の動機としたことが判る。これ吾々が此の時代を特徴づけるに當つて、かゝる經濟的施設の存するにも拘らず、之を政治的準備の時代となす所以である。想ふに新政府の基礎いまだ定まらず、其の財政的根據の未だ確立せざる當時にあつて、當路者の關心が政治財政に重心をおいたことは、定に當然であらう。

(二) 然らば此の時代の吾が國民經濟は、一般に如何なる特徴を示したか？一言にせば、此の時代を通じて經濟活動は攪亂され、國民經濟の發展は一般に停頓した時代であつた。此の攪亂停頓の原因は、維新の變革を中心とする政治的騷亂を主要のものとする⁹⁾こと勿論であるが、之と共に此の政治的變革が、開國通商と前後して若くは開國通商を動機として實現されたといふ事實を看過してはならぬ。

安政六年の開國通商は先づ第一に、紊亂した幕末の貨幣制度を崩壊せしめ、物價暴騰の過程を経て國民生活を攪亂し、次いで輸出入品を通じて吾國民の生産及び消費を攪亂した¹⁰⁾。それ故に開國通商といふ經濟的原因が假りになかつたとすれば、よし維新の變革が行はれたとしても、之に

5) 山利公正傳(大正五年)一四〇頁以下、世外侯事歷維新財政談(大正十年)上卷
一一頁以下 本庄博士；前掲論文
6) 世外侯事歷維新財政談中卷一四六頁以下 菅野學士；前掲論文
7) 松方正義；前掲書八二頁
8) 同上 八八頁

よる經濟的擾亂の程度は、何程か輕減されてゐたに相違ない。

けれども維新の政治的變革および之に伴ふ豫備的ならびに後續的騷亂は、それだけで國民經濟を攪亂するに十分であつた。此の變革は第一に舊時代に存した株仲間の特權を廢止して庶民階級を生産的に解放した。同時に法制と慣習に束縛されてゐた彼等の消費生活は全く解放されて、主として個人の購買力に依存することゝなつた。第二に此の變革は又、從來特權によつて不生産的階級を形成してゐた武士階級を解放して、之を生産階級となした。かくして維新の變革は人的方面から國民經濟に激動を與へたのみならず、封建制度に特有な地理的經濟關係を破壊することによつて、東京・大阪をはじめ全國の城下町に於ける生産および消費活動を攪亂したことも少くなかつた¹¹⁾。

かくの如き時代にあつては、國民生産力の大なる發展を期待し難きこと言ふまでもない。殊に政治的安定を前提とする信用經濟は、かゝる時代に遭遇して却つて一時甚だしく衰頹せざるを得なかつた。明治十一年田口博士は之に就て次の如く言ふ。

『蓋し大阪の地たるや百貨の輻輳する所商估の往來する所、殊に封建の昔日に在ては、凡商賣品と名づくべきものは一旦皆大阪に集り、價位を定めて然る後四方に販賣する其狀恰も歐米各國の物産一旦必ず英京龍動に集り、價格定つて後四方に輸出するものゝ如し。稱して日本第一の商業地と爲せしも決して誣言にあらざるなり。故を以て從來切手形の類大に貿易上に行はれて、其取引常に二億萬圓の巨額に昇れることありと言へり。然るに維新の際此の良習美慣は兩替屋と共に腐滅せしを以て、爲めに此の地の金融を壅塞し、大に商業の衰頹を來たせしが、輒近に至るに迫んで、二三銀行の設立に逃ひ、此の舊習遺

9) 本庄博士；經濟史考（大正十四年）四七四頁以下參照、高橋龜吉著；明治大正産業發達史（昭和四年）第二編第二章參照

10) 田口博士著；自由交易日本經濟論（田口卯吉全集第三卷五九頁以下）

11) 田口博士著；同上五六頁以下

法は再び興發し駁々として増進するの勢ありと聞く云々と。¹²⁾

今この時代に於ける經濟的停頓の事實を數量的に實證すべき確實なる資料を有しない。たゞ外國貿易の數量は、之を側面から觀察し得る材料となるであらう。當時は開港後の十年代に相當するから、外國貿易は著しく増進したかに想像されるけれども、事實は左表の如く、明治初年を除けばその増加傾向は意外に緩慢なものを發見するであらう。

物品輸出入高表¹³⁾ (單位千圓)

年次	貿易總額	輸入	輸出	差額
明治元年	二六、二四六	一〇、六九三	一五、五五三	(出) 四、八六〇
二年	三三、六九一	二〇、七八三	一二、九〇八	(入) 七、八七四
三年	四八、二八四	三三、七四一	一四、五四三	(入) 一九、一九八
四年	三九、八八四	二一、九一六	一七、九六八	(入) 三、九四八
五年	四三、二〇〇	二六、一七四	一七、〇二六	(入) 九、一四八
六年	四九、七四三	二八、一〇七	二一、六三五	(入) 六、四七一
七年	四二、七七八	二三、四六一	一九、三一七	(入) 四、一四四
八年	四八、五八六	二九、九七五	一八、六一一	(入) 一一、三六四
九年	五一、六七五	二三、九六四	二七、七一	(出) 三、七四六
十年	五〇、七六八	二七、四二〇	二三、三四八	(入) 四、〇七二

三 明治初年及び七年の恐慌

さて明治初頭の十年間は、經濟的には全體として攪亂停頓の時代ではあつたけれども、而し其

12) 東京經濟雜誌第一卷第一號一〇頁

13) 松方正義；紙幣整理始末附錄に據る。

中にも多少の緩急弛張を認められる。明治一二年及び七年の恐慌、明治三年、五年、八年の特殊な投機熱の流行の如き是である。

(一) 明治一二年の恐慌は、第一に維新の變革に伴ふ鳥羽伏見・東征・江戸・東北・函館等の政治的騒亂を原因とし、第二に元年及び二年の凶作を直接の動因として起つたもの、様である。『米遣ひ經濟』の域を脱してゐない當時の状態に於ては、米の豐凶騰落は直ちに國民の生活に重大な影響を及すことは言ふ迄もない。凶作に伴ふ米の暴騰は終に飢饉に導くこと封建時代に屢々見た所であるが、果して明治二年には東北地方の飢饉を見るに至つた。

都市商工民も亦、戰亂の餘沫を受けて恐慌状態を免がれ得なかつた。戊辰役前後の東京は、一時全く無政府状態に陥り、浪士や窮民は白晝相携へて富豪を襲ひ、商家を掠奪したから、商估は店を閉し有産者は産を纏めて避難し、京阪江勢の商人は、支店を鎖して其の資本を本店に回收するといふ状態であつた。大阪の經濟的攪亂も亦決して東京にゆづらなかつた。諸侯の藏屋敷を中心とした藏元以下の金融機關、掛屋以下の商業機關は、諸侯の沒落と共に沒落の運命に陥り、殊に明治政府が金札流通策として採つた大阪の銀目の廢止は、これまで兩替屋を中心として大阪に發達した信用取引を破壊し、手形小切手の流通を阻止したから、そのために兩替屋の倒産するもの多く、金融界の恐慌を惹き起すに至つた。

然るに明治二年五月の北海道鎮定を以つて戰亂も一時終熄し、三年の豐作と輸入米とのために米價も次第に下落したから、此の頃から國民の經濟生活も稍々安定を得て、攪亂停頓の裡にあり

1) 安田善次郎傳(大正十三年)一五一頁以下

2) 兩替商沿革史(明治三十六年)一三三頁以下、世外侯事歷維新財政談上卷四二頁以下、瀧澤直七著；稿本日本金融史論(大正元年)一三——一四頁

ながらも多少の緩和を見るに至つた。

(二) 明治七年の恐慌も亦、略々同様の原因によつて惹き起されたもの、様である。此の年二月には佐賀の亂あり、四月には征臺のことあつて再び戦塵のあがると共に、恰も六年の凶作を受け、七年には米價騰貴し、物價も亦騰貴して、國民生活を壓迫するに至つた。都市商工民はまた、信用逼迫のために恐慌に襲はるゝこととなり、七年末には遂に幕末以來三井組と比肩して活動した豪商小野組及び島田組の破綻を見るに至つた。小野組破綻の事情に就て、明治開化史は次の如く言ふ、

『明治七年は商賣上に一大大變動ありし年なり。前條に記する如く横濱港に穀船紙の失敗あり。却て豪商數人破産せり。初め小野組は三井と拮抗し、常に其右に出てんことを欲し、各地に支店を設け公衆の金を預り、諸般の商業手を下さざるなし。此時政府は、官金を預る者に相當の抵當物を出さしめた、三井は預り金も少なく、又妄に商法に着手せざるを以て直ちに其命に逼るを得たれども、小野は抵當を出すこと能はず、遂に身代限となり、幾くもなく三谷、島田等の豪商亦破産す。其餘、商賣の信憑地に墜ち、金融壅塞するに至れり。』と。

一般的には當時の金融逼迫は、金融制度の不備と金價騰貴といふ外來事情に負ふもの、様である。當時存在した四つの國立銀行から發行さるゝ銀行紙幣は、何れも金兌換を許したから、七年下半年に至つて金の世界的騰貴を見た外國商人は、盛んに金貨を兌換して輸出した。従つて銀行紙幣は發行するに従つて直ちに兌換されて銀行に戻り、その流通高は次第に減少して銀行の取引は困難となり、他方に金の流出は準備金を涸渇せしむるに至つたから、國立諸銀行は政府に乞ふ

3) 世外侯事歴維新財政談下卷四二四頁以下、明治財政史 第十三卷四二三頁以下
4) 渡邊修次郎著、明治開化史(明治十三年)一七〇頁

て新紙幣を借受け一時を凌ぐことゝなつた。當時の事情に就て明治財政史は報告する、

『……明治七年末豪商小野組並に島田組の破産するあり、斯界の信用全然失墜して、當に放資の回收極めて困難なるのみならず、日に預金の取付に會ひて百方苦慮の際、厄難若りに迫り來りて金貨は彌々騰貴の一方に傾き、銀行紙幣の流通殆んど杜塞し、國立銀行運轉の資金日に益々涸竭して、營業の危殆累卵の如く、經營遂に如何とも爲すべからざるに至れり』と。

さて明治初年及び七年の恐慌は、政治的準備の時代に經驗した二つの恐慌であるが、既に述べる所によりて明かなる如く、是等は、發展した資本主義に於て見る所の近世的恐慌とは、著しくその性質を異にするものである。第一に是等は好景氣の絶頂に於て其の反動として勃發した恐慌ではない。第二に是等は生産過剰といふよりは寧ろ生産不足(凶作)に伴ふて起つたものである。

第三に是等は物價暴落に伴ふて起つた恐慌ではなくて、寧ろ米を主とする物價騰貴に伴つたものである。第四に是等は戰亂その他の非經濟的要素を主要な原因として惹き起されたものである。

一言にせば、當時の恐慌は、封建的色素を多分に包含するものであつた。このことは即ち、當時の吾が國民經濟の特質を側面から反映するものであると見る事が出来るであらう。

(三) 是等二つの恐慌を挿んだ中間の時期は、或る程度の緩和を見たものではあるが、併し最初に述べたる如く、此の時代を通する一般的な壓迫は、經濟活動の不安と停頓を免れ得なかつた。

そして此の如き長期に亘る不安停頓時代の特徴として、或る偶然の機會から、特殊な流行的投機熱を煽るに至ること珍らしくない。謂ゆる『明治三年の豚、五年の兎、八年の薔薇』なるもの即ち是である。『明治開化史』に言ふ、

『投機者正路の商業を迂なりとし、萬一の僥倖を求め、物價に非常の動搖を生ずれば、人其利に迷て破産すること少なからず、明治三年の豚、五年の兎、八年の薔薇の如き是れなり。就中兎の變動を甚しとす。其賣買東京に流行するや、外國よりも輸入し、其價貴きは數百圓に至る。愚民其本業を棄て薔て之を買ひしに、其價忽ち下落し、虚を破り道に迷ふ者比々相踵ぐ、甚だしきは自殺する若あるに至る云々』と。

吾々はこれに『昭和の小鳥』を思ひ合せて、其の狀態を想見し得るであらう。

四 明治十年代の經濟的準備

最初の十年間に政治的地盤を確立し得た吾が資本主義は、次の十年代に入つて、直接に資本主義を準備し發生せしむることゝなつた。西南役の終熄から明治十八年末に至る期間を特徴づけて、吾々は之を經濟的準備の時代と言ふ。此の時代に於て吾が資本主義は既に確立した政治的地盤の上に、その最も基礎的な組織を作り上げて、その成立を準備することゝなつた。

固より是等の時代區劃は、多くの時代別に於けると同じく、各々の時代の特徴を容易に把握せしむるための不正確なる手段に過ぎない。既に述べたる如く、或意味に於ける經濟的準備は、すでに前の時代にも行はれ、また此の時代に於ても、政治的準備殊に立憲政治への準備は、最も盛に行はれつゝあつた。それにも拘らず、吾々は此の時代を以つて經濟的準備の時代として特徴づけ得るのは、主として次の根據に基くものである。

第一に此の時期は、前の時代に於ける政治的準備の經濟的整理をつけた時代であつた。明治政

府が其の政治的勢力を確立するに要した財源は、一部は幕府の傳統にならつて御用金の借入によつたが、其の大部分は不換紙幣の發行によらざるを得なかつた。紙片で天下を取つたといはれる程に、政府紙幣の發行は明治政府の確立と密接な關係を有するが、それだけに其の後始末も亦容易な事業ではなかつた。明治五年以後の國立諸銀行の創設は、この紙幣整理の第一着手であつたが、相次いで起つた政治的騒亂は、不換紙幣の整理どころかますます其の増發を必要とした。²⁾かくて西南戰費のための最後の増發と共に、不換紙幣の弊害は此の時期の前半を蔽ひ、後半十四年以後の整理を喚起することゝなつたが、同時にこのことが、後に詳論する如く、此の時期の景氣變動にとつて、決定的な要因を與ふることゝなつた。多くの資本主義國は、其の前時代に於て不換紙幣の難關を経験したのであるが、吾國も亦同じく資本主義を成立せしむるには、此の難關を突破して兌換制度を確立せねばならなかつた。此の意味に於ては、此の時代は資本主義を消極的に準備したことゝなる。

第二に此の時代は又、積極的にも資本主義への準備を整へつゝあつた。其一は金融組織の準備である。財政的目的を有した前の時代の國立銀行は失敗に歸し、紙幣整理の効果上らざるのみならず、金融機能を發揮することも不能となり、七年の恐慌に當つて其の缺陷を暴露したから、明治政府は之に鑑みて條例を改正し（九年）、設立ならびに經營を甚だしく寛大にした。そこで明治十年以後の國立諸銀行は、全く前時代のそれと性質を異にし、且又後に述ぶるが如く國立銀行の簇生時代を現出して、數年間に百數十行を設立せしめ、十三年以後は更に私立銀行熱の勃興を見

1) 山利公正傳二四八頁、瀧澤直七著；稿本日本金融史論二一頁

2) 松方正義；紙幣整理始末八二——八三頁

ることゝなつた。

銀行の勃興と共に手形小切手の流通も頻繁となり、手形交換所の必要に迫られたから、明治十二年には大阪交換所の創設となり、十三年には東京に爲替取組所を見るに至つた。之と前後して明治十一年には東京及び大阪に株式取引所創設せられて、證券賣買を行ふことゝなつた。たゞ當時の取引所に於ける賣買物件は、主として公債殊に金銀公債に限られ、事業會社の株券が上場せられたのは、大阪取引所に於ては明治十七年二月以後の大阪商船株を以つて最初とする。一般に『公債時代を離れて株式時代に入つた』のは、明治十九年の頃からであり、その株式も主として鐵道株船舶株に限られてゐた。この事實は即ち、資本主義の典型的企業形態たる株式組織が、此の時期を通じて尙は一般に行はれ居らざることを證するものと見る事が出来る。

かくの如く國立銀行及び私立銀行、手形交換所、株式取引所等の金融組織は、主として此の時代に設立されたものである。而して言ふまでもなく是等の金融組織は、資本主義の發生成立につて、最も基礎的な必要條件である。

第三に中央銀行の設立及び兌換制度の確立も亦この時代に實現された。この時代の後半に於て、紙幣整理の緒に就くと共に、既に勃興し來つた國立銀行の總括機關として、中央銀行の設立を必要とした。⁵⁾かくして日本銀行は十五年十月を以つて營業を開始し、十八年五月初めて日本銀行兌換券を發行するに至つた。幕末から明治の十年間は、金銀比價の開きのために金の流出にやみ、十一年以後事實上の銀貨國となつた後は、銀紙比價の變動に惱みつゝあつた吾が幣制は、

3) 大阪株式取引所編；大株五十年史(昭和三年)五八七頁

4) 同上 五八八頁

5) 松方正義；紙幣整理始末一二五頁以下

茲に銀兌換制を確立して一應の安定を得ることゝなつた。而して中央銀行による金融組織の統制と、兌換制の確立による幣制の安定とは、資本主義の成立にとつて最も基礎的な必要條件たること言ふまでもない。

第四に自由放任政策への轉換も亦、此時代に於て實現さるゝことゝなつた。明治當初に於ける政府の經濟政策は、大體に於て幕府及び諸藩のそれを承け繼いだものであつて、自ら模範工場を經營して、新式工業の試練をなすと共に、民間工業の模範たらんを期した。それ故に此種の直營事業は、其後に行はれた鐵道國有または政府專賣事業とは其の性質を異にしたものであつた。政府はまた自ら模範工場を經營する傍ら、補助金を交付して民間にも之を獎勵したが、此の補助金制度も亦、後の時代に行はるゝ保護主義とは其の性質を異にし、特殊企業に補助金を與へて試練的模範工場を設立せしめんとするにあつた。

然るに此の模範工場主義は、明治十四年以後放擲せられて、産業の發達は民間の自由に放任さるゝことゝなつた。固より此の轉換は、政府の意識的計畫の下に行はれたものではない。官業及び補助金政策による政府の財政的負擔は、紙幣整理を斷行せんとする十四年以後の緊縮政策と相容れず、財政上の理由から已むを得ず政策轉換をなしたものではあるが、併し吾が國民經濟の客觀的事情が、既にその程度に達してゐたものと見る事が出来る。何れにせよ此の轉換によつて、政府の模範工場は民間の富豪に拂下げられ、且つ民間の新たな起業を獎勵したから、民間企業は十九年以後の好況に乗じて、急激に勃興することゝなつた。言ふまでもなく *Laissez-faire* は

資本主義の精神である。此の根本精神が、他の理由からとは言へ、此の時代に於て確立さるゝに至つたことは、即ち吾が資本主義が次第にその準備を進めつゝあることを證するものと言はねばならぬ。而して是等の準備の中に資本主義の發生し來る過程は、また此の時代に於ける景氣變動と密接な關聯を有する。以下更に此の點を詳論するであらう。

五 西南役後のインフラチオン景氣――

『銀行景氣』

(一) 明治初年以來増發されつゝあつた政府の不換紙幣は、十年の西南役に遭遇して、更に最後の増發を加へねばならなかつた。西南戦費四千二百萬圓の中、十五銀行から借入れた千五百萬圓を除き、其他はすべて政府紙幣の増發によつたものである。いま維新以來發行された政府紙幣の數量を見るに、明治一二年の太政官札四千八百萬圓、二三年の民部省札七百五十萬圓、四年以後の大藏省兌換證券六百八十萬圓、開拓使兌換證券二百五十萬圓に達し、此の外に藩札整理のために二千三百萬圓、爲替會社整理のために四十八萬圓、西南戦費として二千七百萬圓を支出し、是等すべての合計は一億二千萬圓に近い巨額に達する。

政府紙幣とは別にまた、同じく不換紙幣たる銀行紙幣の増發が十年以後特に著しくなつて來た。五年の條例による銀行紙幣は既述の如く金兌換性のものであるが、九年の條例改正では、同時に士族救済の目的をも有つてゐただけに、その設立經營を甚しく寛大にして、資本金の八割ま

では金録公債を政府に供託して同額の銀行紙幣を下附發行し、資本金の二割は政府紙幣を準備とする銀行紙幣を發行せしめた。此の改正に刺激されて十年以後簇生した多數の國立銀行から發行する銀行紙幣は、政府紙幣の増發と相俟つて、謂ゆる紙幣の氾濫時代を現出せしむるに至つた。いま維新以來の政府紙幣及び銀行紙幣の流通高を示せば左の如くである。(單位千圓)

年 末	太政官札	民部省札	大藏省 兌換證券	開拓使 兌換證券	新紙幣及 改造紙幣	一時立替ノ タメニ發行 シタルモノ	銀行紙幣	合 計
明治元年	二、四、〇、七〇	—	—	—	—	—	—	二、四、〇、七〇
二年	四、八、〇、〇〇	二、〇、九、〇	—	—	—	—	—	五、〇、〇、〇〇
三年	四、八、〇、〇〇	七、〇、〇〇	—	—	—	—	—	五、五、〇、〇〇
四年	四、八、〇、〇〇	七、〇、〇〇	四、七、七〇	—	—	—	—	一〇、二、七、七〇
五年 ¹⁾	四、八、〇、〇〇	七、〇、〇〇	六、八、〇〇	二、四、七〇	五、五、〇〇	四、八、〇〇	—	一七、〇、一、七〇
六年	三、六、〇、〇〇	七、四、七〇	六、六、六〇	二、二、一八	二、四、四、四〇	一、一、〇〇	一、二、六、二〇	一七、七、七、〇〇
七年	三、六、〇、〇〇	六、七、七〇	一、四、〇〇	—	五、〇、〇〇	一、一、〇〇	一、九、九、五〇	二〇、〇、七、〇〇
八年	五、一、四〇	二、三、七〇	—	—	三、九、九〇	七、七、六八	一、四、〇〇	二〇、〇、四、〇〇
九年	三、〇、九、五〇	一、四、四〇	—	—	六、八、六七	二、一、八四	一、七、四四	二六、八、八二
十年	三、〇、九、〇〇	一、五、一〇	—	—	六、九、三三	二、一、六二	一、三、三、三二	二九、一、二九
十一年	—	—	—	—	二、九、八〇	二、九、六八	二、六、二七九	二六、八、八二
十二年	—	—	—	—	一、四、一四〇	一、六、二一八	三、〇、四、八〇	一六、〇、三、四〇
十三年	—	—	—	—	一〇、八、三三	一、六、五九	四、四、四六	二九、三、三六

歳入不足ノタメニ發行シタルモノ

政府紙幣

銀行紙幣

合 計

1) 松方正義；紙幣整理始末附録に據る。

2) 明治五年十二月改曆の結果六年一月となる。よつて此年に限り六年一月末の數字を假用す。

十四年	10,500	11,000	11,500	12,000
十五年	10,500	10,500	10,500	10,500

(二) 此の如き不換紙幣のインフレーションは第一に紙幣の下落を來さねばならぬ。明治十年まで略々平價を維持して來た政府紙幣は十一年以後漸次に下落して銀貨との間に打歩を生じ、最低十四年四月に至つて銀貨一圓は紙幣一圓八十錢に相當するに至つた。然るに通貨のかくの如き下落は、之と交換せらるゝ商品の價格を騰貴せしめねばならぬ。即ち物價指數は十年以後の數年間に約二倍の騰貴をなし、米價も亦十年以後著しく騰貴した。

年次	銀一圓ニ對スル紙幣ノ價格 ^{a)}	物價指數 ^{b)}	米價 ^{c)}
明治九年	〇、九八九	一一八	五、〇一
明治十年	一、〇三三	一一九	五、五五
明治十一年	一、〇九九	一三四	六、四八
明治十二年	一、二一二	一五七	八、〇一
明治十三年	一、四七七	一八一	一〇、八四
明治十四年	一、六九六	二〇七	一一、二〇

(三) 物價の此の如き永続的騰貴は、その原因の何たるを問はず、景氣を向上せしむることゝなる。既に十年來不安な停頓状態にあつた吾が國民經濟は、茲に最初的好景氣しかもインフレーション景氣を経験することゝなつた。

此の好景氣に當つて、最も著しく其の餘澤を蒙つたものは地方の農民であつた。彼等は明治政

a) 松方正義；紙幣整理始末附録に據る。
 b) 貨幣制度調査會報告三三九頁以下、明治六年を一〇〇とす。
 c) 深川正米相場一石建年平均

府の發現によつて初めて自由民として解放されたのであつたが、彼等の關心はかゝる名目上の開放よりも寧ろ其の日常の利害にあつたから、明治六年の地租條例は却つて農民の反對を受けること多く、加ふるに明治政府の舊弊打破は、元來保守的な農民を喜ばすものではなかつた。是等の原因から、幕末を受けた百姓一揆は、明治に入つても其の勢を減することなく隨所に蜂起したのであるが、此の農民の反抗運動も亦、明治十年を一轉期として全く其の跡を絶つに至つた。此の事實も亦、明治政府の政治的勢力が最初の十年間に於て確立されたと見る一の根據となるものであるが、然らば何故に農民の向背が此の時期に於て有利に轉回することゝなつたか？ 明治九年の地租金納、十年の地租輕減がこれに動機を與へたことも疑ないが、併し何よりも十年以後の好況の影響を計へねばならぬ。

明治八、九、十年は比年の豐作を受けて米價は下落しつゝあつたが、十一年以後は通貨膨脹の影響を受けて騰貴し、十二年には稀有の豐作、十三年また豐年を續けたにも拘らず、米價は前表の如く騰貴の一方であつた。農民は輕減された地租を貨幣で納めるから、地租の負擔の如きは殆んど輕微となり、鼓腹の状態に酔ふて初めて明治政府の恩澤を心から感謝した。松方大藏卿は當時の状態を報告して言ふ、

『……諸物價は皆一齊に騰貴を極め、就中米は我國産中最多量にして且つ重要な爲め、其騰貴の影響最も著しく、大に地租の負擔を減少し、地價の騰貴非常にして農民は獨り互利を得、俄に奢侈の風を成し、全國を通じて贅澤品の消費大に増加し、伊勢參宮、琴平參り其他大小の都會に遊ぶ者等其數未曾有の増加をなせり云々』と。

(四) 物價の騰貴はそれだけで都市商工民を刺激するに足る。然るに當時は之に加ふるに右に述べたる農民購買力の激増を伴つたから、都市商工業の活況は十分に想像することが出来る。此の數年に於ける東京・大阪・京都の商人數は左の如く増加したと言はれる。⁴⁾

年次	卸賣人數	仲買人數	小賣人數	計
明治十二年	一五、〇四二	七、六一三	八七、九八一	一一〇、六三六
十三年	一五、三六六	九、五七八	一〇九、六八一	一三四、六二五
十四年	二二、八二一	二〇、二二七	一五二、一五一	一九八、一九九

同時にまた著しき投機の勃興を見た。『商業家は物價の變動甚しきに眩惑し、皆投機の奇利を射るにのみ没々として、敢て實業を顧みず』⁵⁾といふ有様であつた。従つて此の好況の初期即ち明治十一年に創設された東京大阪の株式取引所にあつては賣買漸く盛となり、十四年に至つて全盛に達した。固より當時の賣買物件は主として金銀公債であり、従つて當時は正しく『公債賣買の全盛時代』⁶⁾として記録さるゝ時期であつた。

此の好景氣は又、會社組織による新たな企業形式の商工業を勃興せしめた。けれども是等の會社組織は、後の時代に見るが如き大規模の株式組織によるものではなく、多くは基礎薄弱な合名又は合資的小規模の會社に過ぎなかつた。今當時の會社資本額を左に示す。⁷⁾

年次	會社資本總額 (千圓)	商業會社資本 (千圓)
明治十一年	三五、四九一	八九五
十二年	五五、五五一	一、一〇五

4) 瀧澤直十著：『日本金融史論』(大正元年)一三七頁

5) 松方正義：『前掲書』一二頁

6) 大阪株式取引所編：『大株主十年史』(昭和三年)五八六頁

7) 東京經濟雜誌、創刊四十周年記念號(大正八年七月)附錄「國民經濟四十年史」六八頁

〃	十三年	五四、〇七六	一、一〇五
〃	十四年	八六、〇七六	二八、七七九
〃	十五年	一二四、九〇六	五一、七〇七
〃	十六年	一一三、一〇七	三一、四五二

(五) 然らば吾國最初のインフラチオン景氣は何を以つて其の特徴とするか？ 私は之を『銀行景氣』と呼ぶことによつて特徴づけようとする。固より吾國の銀行業は引續き後の時代に於ても著しき發展を遂げたものであり、また此の好景氣に活況を呈したものは獨り銀行業に限らない。併し乍ら既述の如く、此の好景氣を惹起した通貨膨脹の一半は、明治十年以後に簇生した國立銀行の激増に負ふ所である。のみならず此の好景氣によつて勃興した多くの事業の中にあつて、最も著しく將來に發展すべき基礎を確立し得たものは、銀行業であつた。國立銀行の増設が制限される、銀行熱は私立銀行に向ひ、十二年に二行に過ぎなかつた私立銀行は、十五年には一七六行を算し、銀行資本金もまた之に應じて著増した。かくて吾が銀行業は此の好景氣に於て最初の飛躍をなし、次の時代に至つて中央銀行に總括せられて其の組織を完成するための準備を、のへたのであつた。而して吾が資本主義が、その最初の好景氣に於て、何よりも先づ『銀行景氣』を現出したことは、極めて興味あることである。蓋し金融組織は資本主義の發生成立のためには、何を措いても先づ準備さるべき基礎的條件の一つを成すからである。今この好況時代に於ける銀行業の發展を左に示す。

年次	國立銀行		私立銀行	
	行數	拂込資本金 (千圓)	行數	拂込資本金 (千圓)
明治九年	五	二、三五〇		
十年	二六	二二、九八六		
十一年	九五	三三、五九六		
十二年	一五一	四〇、六一六	二	二、五〇〇
十三年	一五一	四三、〇四一	三九	六、二八〇
十四年	一四八	四三、八八六	九〇	一〇、四四七
十五年	一四三	四四、二〇六	一七六	一七、一五二

(六) 不換紙幣の増發、下落に基く此の好況は、併し乍ら其の中に避くべからざる危険を孕むこと言ふまでもない。第一に此の景氣を喚び起した物價騰貴は、紙幣下落の反面に過ぎないのであるから、それは言はゞ一種の空景氣に過ぎない。第二にそれにも拘らず好況によつて惹き起された需要の増大、消費の増加は、輸入の超過となり正貨の流出とならねばならぬ。第三に景氣の進行につれて金融逼迫を來たし金利の騰貴とならざるを得なかつた。是等の點につき松方大藏卿は言ふ、

『……外國輸入品は益増加し正貨流出の勢殆ど底止する所を知らず、……大資本を要する大工業は、金利の高きが爲めに起業を企つる者なし。是れ皆紙幣増發の爲め虛空の購買力を假造したるに由るものにして、其一時物價騰貴の爲め商工業に繁榮の形況あるは、獨氣の漸く蓄積するの兆候にして、一朝潰崩の機熟するに至れば、其害患の及ぶ所寔に測られざらんとす云々と。』

明治財政史は更に之に註釋して次の如く言ふ。

說苑 景氣變動と日本資本主義の發生

第二十九卷

五六七

第四號

九五

『當時社會外面の景況は頗る美觀を呈せしと雖も、此美觀たるや畢竟一時の假裝に過ぎずして、經濟自然の發達に基因するものにあらざるが故に、外面の美觀愈々甚しきに従ひ、内實の空虚愈々甚しく、早晩瓦解の端を開きて遂に不測の慘狀を現出せんとするの存疑なりき』と。

然るにこゝに豫期されたる恐慌は、遂に斷然たる政府の紙幣整理方針の決定によつて、時期尙早の中にデフラチオンの不景氣に轉換し、併も急激なる景氣の下向となつて、茲に十四年を轉期として此の時代の前期から其の後期に入ることゝなつた。明治十四年以後のデフラチオン不景氣に就ては、之を次の機會に譲らねばならぬが、この不況期に於て、『銀行景氣』によつて準備された金融機關は全國的の組織網を作り、兌換制度を確立して始めて貨幣制度を安定せしめ、茲に資本交通に關する組織は一應の完成を見るに至つたのである。

之を要するにわが資本主義の組織は、明治維新の政治的變革と共に直ちに發生し若くは成立したものである。最初の十年間は、經濟的には古き組織の破壊に比例するだけの新しき組織の成立を見ず、國民の經濟活動は甚しく攪亂せられ、従つて國民經濟の發展は或程度に停頓せざるを得なかつた。而して此の間に經驗した二つの恐慌は、他の機會に詳論する如く、多分に封建的性質を有するものであつた。次の十年代に入つて、最初のインフラチオン景氣——『銀行景氣』——を経験するに及んで、資本主義はまづ其の最も基礎的な金融機關から其の成立を準備するに至つた。それ故に資本主義的な社會經濟組織が、新たな政治的地盤の上に、發生し成長して來たのは、大體に於て明治十年代以後のことであらう。それが如何なる過程を経て特に景氣變動と關聯して、育生され成立するに至つたかは、次の機會に詳論するであらう。